



# やさしい嘘

2月16日

Sudden Fiction Project

高階 經啓  
hirotakashina

## 2月16日のおはなし「やさしい嘘」

ベサウは女性を見ると必ず考えてしまうことがある。若い頃は綺麗だったんだろうとか、年を取ったらどんな風になるんだろうとか。自分でもあまり趣味のいい習慣だとは思わない。けれども目の前に若い女性が現れればどんな風に年を取っていくんだろうと想像せずにはいられないし、それが素敵な年の取り方に思えると嬉しくなる。逆に年齢を重ねた女性を前にすると、その肌や髪やまなざしに隠れている若い頃の、あるいは少女時代の面影を探したくなる。いまはせかせかとした口うるさいばあさんでも、もし彼女の奥底に好みの少女が見つければ、ベサウは彼女のことを好きになれる。

ベサウの家には、三日にあげず隣家のばあさんが世話をしにやってくる。ばあさんと言ってもベサウよりは二つ三つ若い。ベサウだって年齢的にはじいさんだ。こうして車椅子にも世話になっている。だが年齢の問題ではない。隣家のばあさんは、そのたたずまいがばあさんなのだ。せかせかとした足の運び、世話焼き丸出しの押し付けがましさ、がさつなものいい、意地悪そうな目つき。「学校に上がる前のチビの部屋でももっとマシよ」とか「どうしたらこんなにちらかせるのかね」とか二言目には小言を言う。でもそんなばあさんの中にも、ベサウは少女の姿を見つけ出す。いたずらっ子の目をして活発で面倒見のいい少女の姿を。

自分がそんな風に見られていようとは知らずにキネリは今日もベサウの家を片付けに行く。車椅子にすわるベサウの家は散らかり放題で見られない。ということにしているが、本当は違う。遙か昔、ベサウもキネリが子どものころのできごとが、ベサウの面倒を見る理由になっている。ベサウは毫碌して忘れてしまったようだが、ベサウとキネリは幼なじみだった。小学校からの帰り道、たまに二人は一緒になった。なにしろ家が隣同士なのだ、学年は違ったが、小さいころは近所の子もみんなで遊んだものだ。三学年も違うのでキネリと一緒にいたからと言って「女と一緒に帰ってる」などと冷やかされることもない。ベサウにとってキネリは妹のような存在だったのだろう。

その日の帰り道、二人は道端でパパウリの小さな白い花を摘んでいた。パパウリ、〈やさしい嘘〉という名のついたその花は花輪をつくれるので女の子に人気の花だった。ベサウはキネリが花輪をつくるのを手伝ってやっていたのだ。摘んだ花を手渡しながらベサウは何の気なしに、どうしてキネリの家には親がないのかと尋ねた。キネリは祖父母と暮らしていた。キネリの両親はキネリが幼い頃に死んでいたのだ。物心がつく前なのでキネリ本人はあまりよく覚えていなかったが、なんでも二人が乗ったセスナ機がジャングルに墜落して、乗員全員が死んでしまったらしい。その話をすると、三学年も年上のベサウはぼろぼろと涙を流して泣き出した。キネリがびっくりしていると、家族が死んでしまうなんて考えられない、キネリが可哀想だと大泣きした。親を亡くした側が貰い泣きと言うのも妙な話だが、キネリも貰い泣きしてしまっ、二人でわあわあ泣いたのを覚えている。キネリはその時のことを忘れていない。だから家族をみんな失ってひとりぼっちのベサウを放っておけないのだ。

キネリもいまは連れ合いを失って一人だが、息子夫婦は首都に出て元気に暮らしている。ときには孫を連れて遊びにやってくる。さびしいけれど天涯孤独のベサウほどではない。でもベサウにもプライドがあるだろうから、「一人で可哀想だから会いに来ている」とは言わない。本当は掃除なんか大嫌いなのだが、掃除好きの世話焼きばあさんということにして、片付けに来ていることにしている。嘘と言うほどのことはない。ベサウの前だけ、ちょっと別な人格を演じているのだ。女学校の学生だった頃、何度か演劇の舞台に立ったことがある。あのときのように、世話焼きばあさんの役を演じているのだ。嘘だとしても〈やさしい嘘〉だ。

\* \* \*

ある日ベサウは町でキネリの姿を見かける。町の広場に立った市場で買い物をするキネリは、いつもの世話焼きばあさんとは違って、ずいぶん上品そうな立ち居振る舞いなので驚いてしまう。そして不意に気づく。それが幼い頃、隣の家に住んでいたあのキネリだということに。小さな

頃は妹のように可愛がり、長じてからはお互いに意識し合うようになったあの少女だということに。ベサウが兵隊にとられ、除隊した時にはもうキネリは都会の男の元に嫁いでいた。世話焼きばあさんの正体はあのキネリだったんだ。果物屋の店先でマンゴーを手に考え込むキネリを見ながら、ベサウはそっとその場を離れる。

じっくり選んだ果物を袋に入れて、キネリはまっすぐベサウの家に向かう。今日は片付けをしたら、果物をむいて一緒に食べよう。わたしが小言を言うのを、あの人は結構楽しんでいるみたいだから、今日も威勢よくぽんぽんとちめてやらなくちゃ。さあ、何を言おうかな。あれこれセリフを考えながら、世話焼きばあさんになりきって、キネリは勢いよくベサウの家のスクリーンドアを開け放つ。

ところがベサウの家はきちんと片付いている。おまけにベサウがいない。車椅子が部屋の隅にぽつんと置かれている。キネリは呆気にとられる。この前に来たのは二日か三日前だ。いつもなら目も当てられないくらいちらかっているはずだ。どうして？ そうか。誰か他に片付けに来たんだ！ そう思った瞬間、自分でも意外なことに、キネリはその顔も知らない何者かに向かって猛烈に嫉妬していた。

二階から誰かが降りてくる。驚いたことにベサウが自分の足で階段を降りてくる。意外にしっかりした足どりで。おまけにどうしたことか、めかしこんでいる。キネリは混乱する。そして自分がだまされていたんだと思う。足が悪いふりをして、人に世話をさせておいて、本当は自分で歩き回れるし、おまけにどこかの女とデートに出かけようとしている。

「嘘ついてたのね！」

「ごめん」

「人に掃除をさせておいて！」

「もうわざとちらかしたりしないよ」

「わざと？」わざとちらかしていたの？」キネリはあまりのことに息をのむ。「どういうつもり？ 人のこと、馬鹿にして！」

「違うんだ、君に来てほしかったんだ」

「え？ なに？ どうして？」

「ちらかしていれば君が来てくれると思ったんだ」

「じゃあ、なんで？」

途方に暮れてキネリは片付いた部屋の中を見回す。わたしはもう用済みなの？ でも次のひと言で事情がわかる。

「キネリ」とベサウが言う。「キネリだったんだね」

おずおずとベサウが一輪の小さな白い花を差し出す。パパウリの花。ベサウの前で、世話焼きばあさんが一人の少女に生まれ変わる。

(「「やさしい嘘」の恋愛物」 ordered by PoorTom-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

## 感謝の言葉と、お願い&お誘い

---

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

## やさしい嘘

<http://p.booklog.jp/book/44278>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/44278>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/44278>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.